第6章　結　　語

本調査地点では弥生時代後期から近代にいたる遺構・遺物を確認した。調査地点は鹿田キャンパスの北東部に位置しており、岡山医学専門学校、岡山医科大学に移管された後、1930（昭和５）年10月にコンクリート建物（炊事場のち管理棟）が建設された地点である。発掘調査はこのコンクリート基礎の扱いに難渋しつつ実施した。近隣では北側で第16次調査が実施されているが小規模なものであり、キャンパス北東部の状況について、まとまった貴重なデータを得ることができた。

本調査地点をめぐる地形環境

本調査地点では弥生時代後期の時点で南半が微高地状、北半は低位部であったことが確認された。鹿田キャンパスにおける地形環境についてはボーリングコア分析を主とした研究による一定の成果が得られ、弥生時代後期段階の地形復元が試みられており(1)、今回の調査成果もこれを補強するものである。キャンパス北部中央（第１次・２次・５次調査地点）に最も高い微高地が広がり、住居・井戸・墓等が確認される。この微高地の東側に低い微高地が広がるが、その東端部に本調査地点南端があたる。本調査地点の微高地部は西から東への緩斜面を呈しており、北側低位部との境界に溝１～３が走行する。北側低位部は砂の堆積が顕著に認められ、河道の状態を経て、弥生時代後期の間にも堆積が進み、次第に微高地との比高差が解消されたことが窺える。本調査地点では低位部の堆積状況に加え、南半微高地の形成過程の分析に必要な堆積状況を記録することもできた。今後、他調査地点も含め、鹿田遺跡の地形環境の変遷について検討を深めたい。

中世の調査成果

本地点で確認された中世に属する遺構は井戸３基と希薄な状況であった。このうち中世前半の井戸２基は調査地点南端で検出したものであり、弥生時代後期の状況と同様、本調査地点南半から調査区外の南方に居住域が存在する可能性を示す。井戸以外の遺構はみつかっておらず、鹿田遺跡において中世前半の集落を特徴づける区画溝も確認されていない。中世前半には、鹿田キャンパスの広範囲に、溝で区画された屋敷地が配置される状況が確認されているが、その並びから推定すると、13世紀前半に比定される井戸５を含む屋敷地は、東をキャンパス東端の（現）枝川に区切られ、西・南を区切る溝は調査地点外に想定される。この段階に本地点北半の低地状態は解消されているが、依然居住には適さなかったと推察される。

中世後半には井戸６が調査区北部で確認される。15世紀後半に廃棄される井戸であるが、これ以降、近世の井戸が多数構築されており、15世紀代以降は調査区北半も居住地として利用され始めたことがわかる。

近世の調査成果

近世の井戸は８基が確認され、近世時期は一帯が居住域であることを示す。柱穴は僅かに検出されているが、まとまりや建物位置を検討することはできなかった。井戸の分布は、調査地点内全域に見られた一方、屋敷を区画するような溝は本調査地点内では確認されていない。

近世については、後述する庭園遺構に伴って出土したいくつかの遺物に注目したい。庭園遺構１（SG1）から出土した肥前陶器紅猪口（図63－1）や土師器煎茶急須（同－４）はいずれも江戸時代後期に比定される化粧道具や茶道具の類にあたる。庶民の持ち物には相応しくない上質のものである。同様に土製角型焜炉（図64－Ｔ８）も江戸時代後期に比定され、煎茶用焜炉である可能性が考えられる。こうした特徴ある遺物は、同じく近世に居住域が確認された第20次調査Ｂ地点でも指摘される(2)。17世紀前半に比定される井戸22から出土した京焼の猿形水滴や18世紀半ばに比定される肥前磁器水滴片（土坑20出土）に代表されるような、やはり庶民とは一線を画する品の存在がある。また同調査地点では、16世紀末に比定される土坑から「寺」刻印のある瓦片が出土しており、近隣に寺の存在が想定されている。

以上のように近世については、本調査地点を含むキャンパス北東部に居住域が展開し、そこには寺の存在や、一定の富裕層の存在が窺える。

近代の調査成果

本調査地点の成果を特徴づける点の一つは近代遺構に関する成果である。前章までに検討してきたように、近代における本調査地点は、当時の字名で岡五番160地番と158地番にあたる。地番により所有者も異なり、検出した庭園遺構は北側のSG2は160地番、SG1は158地番に位置する。SG1については1925（大正14）年に撮影された写真の存在が判明したことから、庭園および邸宅の配置の復元を行い得た（第５章２）。これらの遺構の廃棄年代は158地番が1928（大正14）年、160地番が1928（昭和３）年以降であることが明らかである。一方、庭園遺構の造営年代について確定はできないが、護岸石組の間から出土した遺物から江戸時代後期以降であり、土地取得年代を重視するならば、158地番は1895（明治28）年、160地番は1898（明治31）年を１つの手がかりをすることができる。

２基の庭園の護岸には石組が採用されており、その構造を記録した。上部は現代の建設工事により破壊されていたが、基礎部分については詳細を確認することができた。構造類例として岡山市南方遺跡で確認された溝が挙げられる(3)。南方遺跡は岡山城下町の一画に位置しており、絵図とも照合が可能な地点である。同遺跡溝１は侍屋敷の区画をなす溝で、石積みの側壁を有する。石積みの基礎に胴木と胴木前面に打ち込まれた杭が確認されている。同溝は18世紀前半以降の構築で、明治期まで機能したとされる。この例に比較すると、本調査地点の庭園護岸は規模が大きく、つくりも複雑であるものの、基礎構造の類似は見逃せない。本調査地点の庭園造営の際にこうした城下の水路石積み構造を知る職人が関わったことも考えられよう。

近代の調査に際しては、遺構・遺物ともに本調査地点の全体量の１/２を占める状況であった。報告書の記載にあたっては、図の縮尺やオルソ図の活用などを考慮した(4)。

本調査地点の成果について項目毎に述べてきた。鹿田遺跡で近代の居住域の調査は初の事例であり、岡山県医学専門学校・岡山医科大学移管直前の状況が捉えられたのは、本学敷地の歴史を解明するうえで重要である。中世・近世についても新たな知見を追加し、敷地全体での土地利用状況を検討する材料を得られた。特に近世・近代については未整理報告が残っており、今後改めて全容を検討したい。

註

(1) 山本悦世　2021『中部瀬戸内地域における縄文時代の環境変動と人間活動に関する考古学的研究』(平成30年度～令和２年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書
山口雄治　2020「ボーリングコアを用いた古地形の発達過程とその評価－岡山市鹿田遺跡を例として－」『日々の考古学３』東海大学文学部考古学研究室

(2) 岩﨑志保　2022『鹿田遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第38冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

(3) 氏平昭則　2012『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告234　岡山県教育委員会

(4) 近代の埋蔵文化財調査に際しては文化庁通達により「特に重要なものを対象にすることができる」とあり、本調査の内容は本学の歴史解明の上で重要であると判断し、その成果の公開に務めた。